

Memory

メモリー

1

突然、目が覚めた。

冷たい。

僕は、倒れていた。

冷たいのは、土だった。湿った土が、頬に触れている。けれど、不思議と不快ではなかった。

そう、不快ではなく、不安。

まるで生まれてきたばかりのような、そんな不安を抱いた。

僕は、起き上がる。体に痛みは無い。周囲を見回す。

ここは、森だ。

深い、森。

どうして、こんなところに倒れていたのか、思い出そうとした。

その瞬間。

ふと、森の向こうから、何かがやってくる気配がした。

ガサガサッ！

<それ>は、草むらから突然飛び出し、僕に向かってきた。僕は、反射的に体を反らす。<それ>は僕をかすめて、着地し、こちらを向いた。

それは、3つの首を持つ魔獣、ケルベロスだった。うなり声を上げ、再び、僕に向かって来る。

僕は、腰から剣を引き抜く。

ケルベロスの牙を避けながら、刃を、その首の1つに斬りつける。

「グギャアア！」

斬り飛ばされたケルベロスの首は、叫び声を上げながら、地面に落ちる。血があたりに撒き散らされる。

しかし、ケルベロスはこの程度では死なない。

僕は、再び、ケルベロスと向き合おうとした。そのとき、左の脇腹に、鋭い痛みを感じた。見ると、服が裂け、血が滲んでいる。今の激突ではない。最初の草むらからの一撃を、かわしきれていなかったのだ。

その痛みが、僕の動きを止めた。

そのとき、ケルベロスの2つの頭にある、4つの瞳が、赤く光った。

「しまった！」

ケルベロスの口から、大きな火の玉が吐き出され、僕に当たった瞬間に、爆ぜた。

「うわああ！」

僕は衝撃で吹き飛ばされ、木に激突した。背中に痛みが走る。すぐに起き上がろうとするが、爆発の衝撃で体が痺れて、思うように動かない。

「グルルル」

ケルベロスがヨダレを垂らしながら、僕に近づいてくる。

「くそ…」

僕があきらめかけた、その瞬間。

ゴォォォォ！

赤い炎が、ケルベロスを包んだ。

「グギャァァァ！」

ケルベロスは、断末魔の叫びを上げながら、真っ黒な灰と化していった。

「これは…、魔法？」

「大丈夫でしたか？」

女性の声が聞こえた。けれど僕は、体の痛みと、安心から、すぐに気を失った。

2

目が覚めると、僕はベッドの上に横たわっていた。

「よかった、気が付いたのね。大丈夫、傷はもうふさがっているわ」

ベッドの脇には、女の子が座っていた。声に、聞き覚えがあった。

「…君が、助けてくれたのか？」

「私は、ヌーシャテル。みんな、ヌーシャって呼ぶわ。あなたは？」

そう訊かれて、僕は戸惑った。

「僕？僕は…」

僕は？

誰だ？

そうか。

これだったのだ。

森で目が覚めたときの、不安。

生まれたばかりのような、あの不安。

「僕は…、わからない」

僕はつぶやいた。

「もしかして、記憶が？」

ヌーシャは、じっと僕を見つめる。

「ああ、名前も思い出せない。あの時、僕は森の中に倒れていて、
でも、なぜあんなところにいたのか…」

僕はつぶやく。

しかし、ヌーシャの口から出た言葉は、意外なものだった。

「やっと、出会えたわ」

「…え？」

「あなたは、私たちの神殿の伝説にある『記憶を失いし勇者』なの
よ」

3

ヌーシャの話は、こうだった。

この大陸は、今、危機に瀕している。悪の魔術師ゴルゴンが、魔
獣を操り、世界を支配しようとしているのだ。

しかし、ヌーシャがいた神殿には、ある伝説があった。

世界が危機にあるとき、モンドールの森（僕が倒れていた森のこ
とらしい）に、記憶を失いし勇者が現れる。勇者は、3人の仲間と
ともに、危機から世界を救うであろう。

…、というものらしい。

「そして、伝説にはこうあるわ。勇者の右肩には、星型のアザがある、と。私、実は、あなたの怪我を治療するときに見たの。あなたの右肩に、星型のアザがあるのを…」

僕は、右の袖をめくった。そこには、確かに星型のアザがあった。

そんな記憶も、僕にはない。

「あなたが、勇者なのよ。私は、神殿から選ばれて、あなたを探しに森に来ていたの。お願い。私と一緒に、残りの2人の仲間を探しましょう。そして、世界を救いましょう」

僕は、悩んだ。

そんなことを、いきなり信じろだって？

けれど、

けれど。

僕には、何もない。

記憶も。

目的も。

けれど、この世界を作った神様が本当にいるのなら。

その神様が、僕に与えた使命があるのなら。

僕は、その使命を果たそう。

導かれた先に、僕という存在の答えがあると信じて。

僕は、ヌーシャと一緒に、残りの2人の仲間を探す旅を始めることにした。

旅の中で、僕たちは多くの困難にぶつかったが、僕とヌーシャは力を合わせてそれに立ち向かい、戦士バラカと、騎士エポアスという、心強い仲間を得た。

これで、魔術師ゴルゴンとの対決への準備は整ったはずだった。

4

「きゃあ！」

ヌーシャは、突風にはじきとばされ、そのまま地面に叩きつけられて動かなくなった。

「グハハハハ！その程度か！」

魔術師ゴルゴンは、高らかに笑い声を上げた。

地面には、ヌーシャの他に、バラカ、エポアスが横たわっている。誰も、もう立ち上がることもできない。

唯一立っている僕も、右腕を負傷し、利き腕でない左腕で剣を握

っていた。

「ふん、伝説の勇者たちともあろうものが、情けない姿よのう。だが、これで、私を邪魔するものはいなくなる！とどめじゃ！」

魔術師ゴルゴンの魔法により、僕は炎につつまれ、そのまま、死を感じた。

5

「うわあ！」

僕は、叫び声を上げて飛び起きた。

「どうしたの！？」

ヌーシャが、心配そうに僕を見た。

周囲を見る。

洞窟。

そうか、ここは。

「夢でうなされでもしたか？無理もないぜ。これから、ゴルゴンとの最後の戦いなんだからな」

そう言ったのは、バラカだ。

「だが、勇者ならば、どんな強大な敵にも、毅然と立ち向かわねば

なるまい」

続けたのは、エポアス。

そう、これから僕たちは、ゴルゴンとの最終決戦に挑むのだ。

僕は、ヌーシャを見る。

「大丈夫よ、私たちが力を合わせれば、きっと勝てるわ」

僕は力強くうなづく。

そして、休息を終えた僕たちは、ゴルゴンの待つ洞窟の最下層へと進んでいった。

6

「ふん、性懲りもなく、また来たか」

ゴルゴンは言った。 (また?)

「よかろう、かかって来るがよいわ！」

僕は剣を引き抜く。しかし、バラカが僕を制した。

「ここは、俺から行くぜ」

バラカは、両手に斧を持って、ゴルゴンに向かっていく。

しかし。

ゴルゴンの魔法により、氷の刃がバラカに降りそそぐ。

「ぐああ！」

氷に刻み斬られたバラカは、そのまま地面に倒れた。

「くそっ！いくぞ！ゴルゴン！」

僕は、ゴルゴンに向かって斬りかかる。

しかし、ゴルゴンはひらりと避け、逆に、僕の右腕を鎌で斬りつけた。
(右腕?)

右腕から血が噴出す。しかし、これは作戦だった。

「いまだ！エポアス！」

「おう！」

エポアスは、僕が斬りかかった隙に、ゴルゴンの背後に回り、槍でその背中を一突きにした。

いや、しようとしたその瞬間。
(爆発する)

「ぐわああ！」

叫び声をあげたのは、エポアスだった。

足元が爆発したのだ。すでにゴルゴンは、足元に魔法を仕掛けていたのである。エポアスは衝撃で弾き飛ばされ、そのまま地面に叩きつけられた。

「こ、こんな…」
(逃げるんだ、ヌーシャ)

そして、あまりのゴルゴンの強さに動揺しているヌーシャを、ゴルゴンの魔法による竜巻が襲った。

「きゃあ！」

ヌーシャは、突風にはじきとばされ、そのまま地面に叩きつけられて動かなくなった。

「フハハハハ！その程度か！」

魔術師ゴルゴンは、高らかに笑い声を上げた。 (これは)

地面には、ヌーシャの他に、バラカ、エポアスが横たわっている。誰も、もう立ち上がることもできない。

唯一立っている僕も、右腕を負傷し、利き腕でない左腕で剣を握っていた。 (繰り返している)

「ふん、伝説の勇者たちともあろうものが、情けない姿よのう。だが、これで、私を邪魔するものはいなくなる！とどめじゃ！」

魔術師ゴルゴンの魔法により、僕は炎につつまれ、そのまま、死を感じた。

何回目かの、

死を。

「あーあ、やっぱり、何度やっても無理だ。勝てっこねーよ、これ。

ゴルゴン、強すぎ」

サトルは、ゲーム機のコントローラーを投げ出してそう言った。

画面には、「GAME OVER」の文字。

「だから言ったじゃん。もっとレベルを上げないと無理だって。武

器も、もっといいのを買わないと。お金ちゃんと貯めてさ」

漫画を読みながらそう言ったのは、友人のタケシだ。

「だってさー、めんどくせーじゃん、そういうの」

「いやいや、地道に努力することも大事だって」

「なんで、ゲームまで地道に努力しなきゃなんねーんだよ。オレ、

もうこのゲームやーめたっど」

「ねえねえ、じゃあ、私にやらせてよーう」

ソファでお茶を飲んでいた、サトルの妹のケイコが言った。

「ん？ああ、お前、やる？いいよ、俺たち、今から塾だし」

「わーい。いってらっしゃーい」

「じゃあ、またね、ケイコちゃん」

「ばいばい、タケシくん」

「なんだよお前ら、デキてんのかよ」

「ええ！？何言い出すんだよ急に」

そんな会話をしながら、サトルとタケシが部屋を出て行くと、ケイコは、ゲーム機の電源を入れた。

オープニングの画面になり、「最初から始める」のボタンを押す。

すると、

『メモリー容量がいっぱいです。データを消してください』

と、表示が出た。

「ありゃりゃ。うーん、お兄ちゃんのデータ、消しちゃってもいいよね…、もうやらないって言ってたし」

ケイコは、サトルのゲームデータを削除しようとした。

その瞬間。

「ケサナイデ」

「？」

ケイコは、何か聞こえた気がしたが、気のせいだと思い、データ削除を終えると、ストーリーが始まった。

8

突然、目が覚めた。

冷たい。

僕は、倒れていた。冷たいのは、土だった。湿った土が、頬に触れている。けれど、不思議と不快ではなかった。

そう、不快ではなく、不安。

まるで生まれてきたばかりのような、そんな不安を抱いた。

草むらから、3つの獣の首を持つケルベロスがやってくる。

その予感を感じながら、僕は起き上がった。

僕には、何もない。

記憶も。

目的も。

けれど、この世界を作った神様が本当にいるのなら。

その神様が、僕に与えた使命があるのなら。

僕は、その使命を果たそう。

導かれた先に、僕という存在の答えがあると信じて。

END